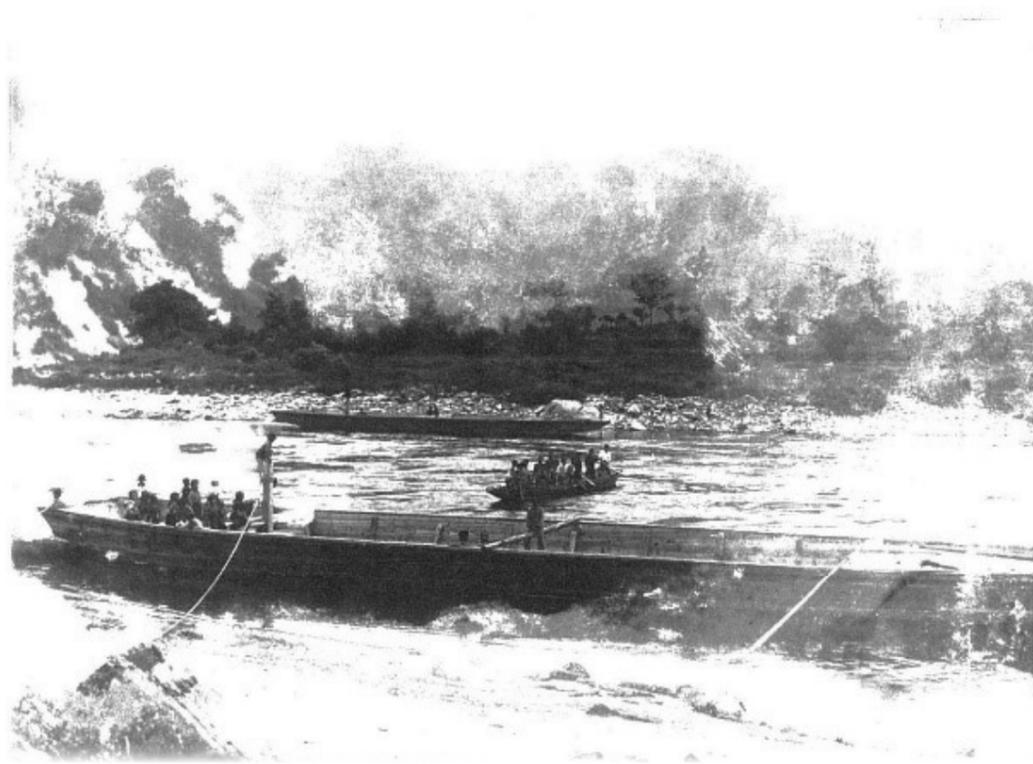


プロローグ

本名に生まれ本名に育ち、嫁いだ先も町内の玉梨だった。つまり、他所に暮らすことなく 80 年を生きてきた人生である。自らを井の中の蛙と称し、「ここしか知らねえが、何も困んねえで生きてきたぞ。こおだいいどこにいて、他になんて行ってはいらねえべ。」と豪語する。今回の主人公、順風満帆の人生かと思いきや、決してそうではなさそうだ。

奥会津と呼ばれる地域の中の金山町。その中央にある本名という集落から、この物語は始まっていく。



伊南川発電所建設時の資材運搬船 西谷・本名間（1936年〔昭和11年〕頃）『山のさざめき川のとどろき』より 福島県金山町教育委員会発行 2019）：

さて、その年もいつも通り、埋まるほどの雪に覆われて年が明けていた。豊かとは程遠い農家の五人姉弟の四女として、昭和 17 年 1 月 15 日に生を受ける。生まれた時からどこかどっしりとした女の子だったという。栗田サキノと言う名前は親ではなく、じいさまとばあさまで相談して付けたようだ。「こおだ貧乏な家は、子のつく名前なんて付けてはなんねえ」と、ばあさまがよく言っていたそうだ。確かに女四人の名前は、ツガノ、ツトム、静賀、サキノと誰も子の付く名前はない。

ちなみに、四番目に生まれた一人だけの男の子の名前は和三郎という。なぜ三男でもないのに和三郎なのか、ここにはじいやばあやの深い願いが込められていたようだ。何代か前のこと、とても優秀で人望も厚い栗田家では語り継がれる人物がいた。その人の名が和三郎で、この子もどうかそんな人物に育ってくれますように…との思いで名付けたそうだ。同じ子供の名付けでも、女の子に対するものとかかなり気合の入れようが違う。やっと授かった男の子への喜びと期待は、並々ならぬものだったのだろう。

この地域の貧しくもごく普通の家族のもとに、末っ子として生まれた女の子が生来の男勝りな性分が顔を出し、かなりやんちゃな日々を送っていく。どこにでもある小さな村であった本名の歴史が、戦後の只見川での相次ぐ発電所の建設により大きな変化の波に巻き込まれていく。

そんな変化の渦中にいながらも、本人の関心は全くもって変わらない。まずは食べ



きかんぼサキ（坂内サキノ）

ていくこと。そして、ひとの道に反することをしないこと。さらには、いつも楽しむこと。これに尽きるのである。いくつかの環境を、まっしぐらに生きてきた人の人生を紐解いていこうと思う。これは、正真正銘の金山っ子の人生でもあり、そして紛れもない私の母の人生でもある。この土地でこの家族と暮らす日々から、“きかんぼサキ”がみるみる現れていく。

「あっという間の八十年や！あははは」。
どうなることやら。